

1 学校教育目標

学ぶ 鍛える 思いやる

2 めざす学校像、児童・生徒像、教師像

○学校像	持続可能な社会の実現に向けて 社会の変化に対応し進化し続ける学校 安心・安全な学校
○児童・生徒像	自分を律し（自律）、多様性を受け入れ（協働）、豊かな創造性を備え（創造）、持続可能な社会の創り手となる生徒の育成 1 文章や情報を正確に読み解き、対応する力をもつ生徒 2 様々な分野に対して好奇心、探求心をもつ生徒 3 他者の意見を受容し、調整する力を身につけた生徒 4 困難なことを乗り越える力をもつ生徒 5 価値を見つけ出す感性と力を備えた生徒
○教師像	持続可能な社会の創り手の一員として、多様性を受け入れ、新たな価値を創造する教師 Society5.0を生きる生徒を育てる教師 学び続ける教師

3 学校の現状及び前年度の成果と課題

1 学校の現状と課題

多様な価値観を受け入れ、協働していく社会において、自分を律することは大変重要な要素である。学びの意欲が向上する基盤となるのは生活規律の確立、規範意識の醸成が重要である。生活指導の徹底を図り、安全・安心な学校をつくりあげていきたい。

本校生徒は、学習意欲や自己肯定感が高いが、各種学力調査の結果は満足できるものではない。基礎基本の定着と読解力向上の取り組みを継続させ、主体的な学びの活動を取り入れ、思考力・判断力・表現力を育成していく。

2 成果

生徒の学力向上には、教師の授業改善・授業力向上が不可欠である。教師の授業観察週間と研修の実施は今後も継続していく。A I ドリル、I C T 機器、Google Work space for Education を教育活動全般に取り入れ、G I G A スクール構想を進めることができた。

4 重点的な取組事項

	内 容	実施期間（年度） R:令和				
		R3	R4	R5	R6	R7
1	学力向上アクションプラン	○	○	○	○	○
2	生活規律の確立、規範意識の醸成	○	○	○	○	○
3	支援の必要な生徒、不登校生徒への継続的支援	○	○	○	○	○
4	学校、家庭、地域の協働による生徒の育成	○	○	○	○	○

5 令和5年度の重点目標

重点的な取組事項－1		学力向上アクションプラン							
A 今年度の成果目標		達成基準 (目標通過率)		実施結果 (通過率結果)		コメント・課題		達成度 ◎○△●	
学びの基礎と学習意欲の向上		学びの基礎の向上3%上昇 年度末到達度テスト正答率 50%		令和5年度通過率65.2% (昨年度60.4% +4.8%) 年度末正答率59.5%		今後も足立スタンダードに基づいた授業を行い、学力の定着・向上に取り組む。		◎	
B 目標実現に向けた取組み									
新・継	アクションプラン	対象学年 実施教科	頻度・ 実施時期	具体的な取組み内容 (誰が、何を、どのように)	達成確認 方法	達成目標 (=数値) (いつ・何を・どの程度)	実施結果	コメント・課題	達成度 ◎○△●
1 継続	AIドリルの活用	5教科 (国数英社理) 全学年	通年 週1回	朝学習、放課後補充等でAIドリルを活用する。	Qubena マネージャー 区学力調査意識調査 生活アンケート	学びの基礎の向上。該当項目3%上昇	毎日、全学年AIドリルを活用し、5教科の学習に取り組んだ。活用月間(11月)の平均解答数は900問以上取り組んだ。	取組は進められているが、知識の定着に向けたAIドリルの効果的な活用を検討していく。	◎
2 継続・新規	Google Work space for Education の活用 読解力向上の取組	5教科 (国数英社理) 全学年	通年	各教科の特性や単元の性質にあわせ、Google Work space for Education を活用した学習を推進する。 読解力向上のため、NIE、朝読書を継続し、新たにビブリオバトルを実施する。	区学力調査意識調査 生活アンケート 各種コンテスト	学びの基礎の向上。該当項目3%上昇	教員だけでなく、生徒が活用する場面を多く設定している。 特別支援学級を含め、多くの授業内で活用が進められている。	ビブリオバトルは夏季休業中に実施したが、継続した取組とすることが課題である。	○
3 継続	教員の授業力向上の取組	全教科 全学年	通年	全教員 足立スタンダードの徹底 十三中スタンダードによる授業観察週間の設定と振り返り研修の実施 小中連携を軸とした授業研究 ICT機器・ツールの積極的活用	生徒による授業アンケート	「めあて」「まとめ」の実施 100% 「指示や説明のわかりやすさ」 80%以上 「学ぶ楽しさ」 80%以上	研修や教科指導専門員、学力定着指導員などの助言を活かし、授業改善に取り組んでいる教員が多い。 ICT機器も積極的に活用している。	主体的・対話的で深い学びの実現や、学習に取り組む意欲の向上を図るために、引き続き生徒の主体的な学びを多く取り入れる授業改善に取り組むことが必要である。	○

重点的な取組事項－２		生活規律の確立、規範意識の醸成			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
生活規律の確立、自律心の育成		生活アンケート等による該当項目 前年度比現状維持～３％上昇	生徒は様々な活動を通して協力や 思いやりの気持ちをもつことが できた。	生徒の主体的な活動が 増えるよう、支援的な 指導がさらに必要であ る。	○
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
安心・安全な学校生活を送るために生活規律の徹底	生活アンケート「あいさつ、服装、持ち物などについて、学校のきまり」を守っている９０％以上	生活指導の徹底 生徒会執行部や学年委員会を中心に、生徒の主体的な活動を取り入れた生活規律徹底のための活動を展開	概ね学校のきまりを守り、落ち着いて生活することができた。 学年行事を学年委員会が企画・運営するなど、生徒中心の活動ができた。	今後も継続して生徒の意見を取り入れながら学校のきまりの見直しに取り組む。	◎
情報モラルの醸成	生活アンケートにおけるSNSトラブルに巻き込まれたことがある生徒の割合１０％以下	セーフティ教室を軸とした情報モラル教育の実施と保護者への啓発活動の実施	全校で１１月にインターネット利用実態調査を実施し、家庭内で明確な使用ルールがない生徒が多かったため、１月に１年生を対象にした情報モラル授業を実施した。	実態調査の結果から見えてきた課題に対し、家庭と連携した取組により意識を向上させることが課題である。	○
いじめ防止に向けた取組の実施と早期発見早期対応	いじめアンケートによるいじめの申告が各学年３％以下を目指す	休み時間等の巡回。生徒の見守りを常に行い、早期発見早期対応につなげる。 WebQUアンケートの結果分析と研修会の実施 SC・SSWとの連携 生活指導部、いじめ防止対策委員会を中心とした組織マネジメントによるいじめ対応。 外部機関との適切な連携	年２回のWebQU、年３回のいじめアンケート調査を活用し、安心・安全な学校生活を過ごすことができるよう必要な生徒への支援に取り組んだ。 週に１回、生活指導部会を開催し、課題を共有するとともに組織的に早期対応に努めている。	引き続き安心して登校できる学校にするために、生徒が相談しやすい環境づくりを行うとともに外部機関との連携を充実させ、支援に努める。	○

重点的な取組事項－3		支援の必要な生徒、不登校生徒への継続的支援			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
支援を要する生徒の情報共有 特別支援教室の円滑な運営 不登校生徒への継続的な支援		関係諸機関との円滑な連携 特別支援教室退級見込み生徒の増加 教室復帰を目指せる生徒の増加	担当教員だけでなく、全教員で共通理解を図り、対応している。	生徒理解に努め、生徒に寄り添った支援とすることが大切である。	○
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
支援の必要な生徒に対する情報共有と適切な支援の提供	支援の必要な生徒の居場所作り 外部専門機関との円滑な連携体制の構築	定期的な特別支援教育委員会の開催 SC、SSWと連携した多面的なカウンセリングと支援 外部専門機関との適切な連携（ケース会議等の開催）	年度当初に生徒理解のための研修会を実施した。 週に1回、特別支援教育委員会を開催し、SC、SSW等との情報交換を行い、具体的な支援につなげることができた。	支援が必要な生徒への理解を深め、組織的な対応を推進する。	○
特別支援教室の円滑な運営と連携体制の構築	取り出し授業の円滑な実施 所属学級担任との十分な情報共有と連携 退級見込み生徒の増加 連携小学校との円滑な情報共有	特別支援コーディネーターを中心とした特別支援教育委員会等での情報共有と調整 円滑な個別支援計画の作成と実施	特別支援教育委員会で通級生徒の情報共有を行い、在籍学級や日常生活での有効な支援に結びつけている。 連携小学校との情報共有により、入学後の支援に生かしている。	個に応じた適切な支援を行うために、研修等により教員の指導力向上を図る。	○
不登校生徒に対する継続的な支援	教室復帰を目指せる生徒の増加	SSW、登校サポーター、チャレンジ学級等の活用 個別対応を要する生徒の居場所の確保と学習支援を行うSSルームの組織的な運営	不登校の未然防止に努めるとともに、初期段階からSC、SSWを活用して家庭との連携を図り対応を図っている。	支援や対応に取り組んでいるが、不登校の解消までつなげることが課題である。 教室復帰率を高めるために、さらにSSルームの活用を図るなどの対応が必要である。	○

重点的な取組事項－４		学校、家庭、地域の協働による生徒の育成			
A 今年度の成果目標		達成基準	実施結果	コメント・課題	達成度
地域人材を活用した教育活動の実践 地域への帰属感・誇りの醸成		生活アンケート「地域に貢献できる大人になりたい」60%以上	行事や体験活動を通して具体的な将来の夢や目標をもつことができた。	社会に貢献しようとする態度を育成することができた。	○
B 目標実現に向けた取組み					
項目	達成基準	具体的な方策	実施結果	コメント・課題	達成度
地域と協働した活動の推進	生活アンケート「地域に貢献できる大人になりたい」60%以上	地域文化祭「あしの芽祭」への参加	1, 2年生を中心に「あしの芽祭」に約250名の生徒がボランティアとして参加し、地域の一員としての自覚が高まった。	生徒にとって様々な立場や年齢の方々と関わることのできる良い機会となっている。	◎
地域人材を活用したキャリア教育の実践	保護者アンケート「学校はキャリア教育によく取り組んでいる」の「わからない」を5%減少	開かれた学校づくり協議会を中心とした地域人材による「職業人の話を聞く会」（1年）マナー講座（2年）、面接指導（3年）等の実施 キャリア教育に関する情報発信	地域の方々のご協力をいただき、2年生対象の職場体験を9月に、1年生対象の職業人の話を聞く会を2月に実施した。 学校で取り組んでいるキャリア教育について、保護者に理解していただけるよう、適切な情報発信が必要である。	各種事業の実施に向け、地域の方々の予定と学校行事の日程上の都合を調整する必要があるが、うまくマッチングしない場合もある。 地域人材を活用したマナー講座や面接指導は実施できなかった。	△

6 まとめ

(1) 今年度の成果と次年度に向けた課題及び解決の方向性

- ・学力調査の結果や日常の教育活動から見えてくる生徒一人一人の課題を自ら認識し、解決するために必要なことを調整しながら取り組む力を育成することが課題である。日々の自主学習に主体的に取り組ませることで、学習力を向上させたい。
- ・全校生徒が一堂に会しての学校行事を4年ぶりに実施できるようになった。運動会や合唱コンクールなど、生徒の活躍の場が戻ってきたことは大変喜ばしいことである。日頃は落ち着いて学校生活を送りながらも、行事の際には本気のエネルギーを見ることができると、全生徒が行事を通して自分や仲間の良さに気付いて力を伸ばしていけるように育てていきたい。

(2) 保護者や地域へのメッセージ

- ・今年度は新型コロナウイルス感染症が5類に移行したため、多くの保護者、地域の皆様に生徒の活動や元気な姿をご覧いただくことができました。本校の生徒の良さである明るく、人懐こいところを生かしつつ、これからの予測不可能な社会を生き抜くために、自分や仲間と考え、判断し、行動できるように育ててまいります。
- ・地域の皆様の学校に対する熱い思いのお陰で、生徒が成長することができました。これからも「あしの芽祭」など、地域の行事に教職員、生徒を積極的に参加させてまいります。特に生徒には、日常の授業では体験することのできない経験を通して成長してほしいと願っております。引き続き変わらぬご理解・ご協力・ご支援をよろしくお願いいたします。

(3) その他（学校教育活動全般について）

- ・保護者、地域の皆様のご理解・ご協力により教育活動をほぼ予定通り行うことができた。インフルエンザのため、1年生対象の魚沼自然教室が9月から11月に延期となったが、魚沼市観光協会から新しい体験プログラムを提供していただき、貴重な体験の場となった。これからもピンチをチャンスに変えられるよう、前向きに教育活動に取り組んでいきたい。
- ・生徒が全ての教育活動に対して本気で楽しく取り組めるよう教職員一同で日々改善を図り、教育力を高めることが必要である。生徒の豊かな成長とその先にある明るい未来につなげていきたい。